

第8章 「倭人（天氏）」と高天原（倭説）

1 天氏と卑弥氏の出会い

(1) 秦時代の天氏と卑弥氏

「前221年」に始皇帝は中国全土を統一して「秦王朝」を樹立する。

- 「倭人（天氏）」は「大凌河下流域」の東に住んでいる。
- 「倭人（卑弥氏）」は「大凌河上流」の「倭城」に居る。

(2) 秦による苦役と逃亡者

「秦王朝」は「万里の長城」や「幹線道路」の建設に人民を酷使する。
秦の苦役を避けて逃亡者が続出する。

辰韓在馬韓之東。其耆老伝世、自言、古之亡人避秦役、来適韓国。

『三国志』辰韓伝

（訳）辰韓は馬韓の東にある。其の耆老（きろう＝老人）は世々伝えて自ら言う、古の亡人が秦の役を避けて来り、韓国に適（ゆ）く。

「辰韓」は「秦の苦役を避けて韓国に逃げて来て建国した」国であるという。

(3) 天氏と卑弥氏の出会い

『契丹古伝』に「天氏は卑弥氏に国を譲る」とある。

其最顕者為安冕辰伝氏。本出東表牟須氏、與殷為姻。讓国於賁彌辰伝氏。賁彌氏立未日、漢寇方薄其先入朔巫達、擊退之。

『契丹古伝』

（訳）その最も顕著なる者が安冕辰伝氏である。本（もと）東表の牟須氏の出であり、殷と姻をなす。国を賁彌辰伝氏に譲る。賁彌氏が立って未だ日が経たないうちに漢が攻めてきて、方（まさ）に薄（せま）り、その先朔巫達に入る。これを撃退する。

「天氏」は大凌河下流域に居る。秦の苦役を避けて「倭城」から「卑弥氏」の一部が大凌河を下って来る。「天氏」は国を「卑弥氏」に譲る。

(4) 天氏と卑弥氏の出会いの時期

「前195年」に「衛氏朝鮮」が「涇水～大凌河」の地域に樹立する。

「漢王朝」の樹立は「前206年」である。

『契丹古伝』に、「国を賁彌辰伝氏に譲る。賁彌氏が立って未だ日が経たないうちに漢が攻めてきて」とある。「漢」が攻めてくる時期は「前206年～前195年」の間であ

ることがわかる。その中央値を取り、「天氏」が「卑弥氏」に国を譲る時期を「前200年」頃とする。

□「前200年」頃、「倭人（天氏）」は「倭人（卑弥氏）」に大倭河下流域の国を譲る。

2 天氏による「高天原」の建国

(1) 「天氏」は「高天原」へ

「前200年」ころ「天氏」は「蓬莱国（高天原）」を目指す。

高皇産霊神は、天之神農氏神、諱は農作比古神という。（中略）大御神（高皇産霊神）に、御子七柱まします。第五の御子を農立比古尊という。即ち国常立尊是なり。第七の御子を農佐比古尊という。即ち国狭槌尊是なり。（中略）農作比古神（高皇産霊神）は、農立比古尊（国常立尊）、農佐比古尊（国狭槌尊）に詔りたまはく、日の本なる海原に、状貌世に二なき蓬莱山のあるあり。汝が命等之に天降りて、蓬莱国を治せと事依し賜ひき。

乃ち先ず農立比古尊（国常立尊）は、其の依し賜へりし命の随に、一族眷属（けんぞく）数多の神々を率いて蓬莱山の煙を目標として天降りましき。然るに、一萬七千五百日を経るも復奏なかりしかば、父大御神、尊の安否を慮り、日夜宸襟（天子の気持ち）をぞ悩し給ひぬる。

則ち農佐比古神（国狭槌尊）に詔りたまはく、吾將に親ら農立比古尊（国常立尊）の後を追ひて天降る可しと。
『宮下文書』

（注記）『宮下文書』は、山梨県富士吉田市の「宮下家」に保存されていた古文書を三輪義熙氏が整理して大正10年に『神皇紀』として出版したもの。私は『宮下文書』としている。

先ず「高皇産霊神」の第五子「農立比古尊（国常立尊）」が「蓬莱山（高天原）」を目指して出発するが、音沙汰がない。次に第七子「農佐比古尊（国狭槌尊）」が農立比古神（国常立尊）の後を追って天降る。

農佐比古尊（国狭槌尊）、乃ち旅装を脩め、一族眷属三千五百神を率いて、御父母二柱の大御神を守護ましまして、亦蓬莱山の煙を目標として天降り遂に大海原に天降りましき。其の着かせませる島を附島（つくしま）といひ、其の行き過ぎませる島を行島（ゆきしま）といひ、其の着かせまさとしつるとき見える島を附地見島（つくちみしま）といひ、南に見える島を南島といひ、其の休みて通りませる島を休通島（きゅうつうしま）という。

（中略）大陸島に渡らせ給う。

『宮下文書』

「遂に大海原に天降りましき」とある。陸路を通り、「大海原」に出ている。

「卑弥氏」に国を譲った「天氏」は「大凌河下流域」から「渤海」に出ているのであろう。さらに「黄海」を渡り、朝鮮半島の南西部に來ている。

『宮下文書』は「国狭槌尊」が高天原へ行く道程を詳しく記述している。箇条書きにすると次のようになる。

○「高天原」へのルート

- 黒鳥に導かれて一小島に着き、また導かれて大陸島に渡る。故にその小島を佐渡島という。
- 吾將に食料盡きなむとす。
- 山を越え谷を渡り行くこと五日にして原野に出る。一帯稲穂なりけり。
- 遂に海浜に出る。魚骨を以て釣り針をつくり魚を釣る。
- 又山を越え進み、高い原野に出る。さらに上りその頂に達す。東南はるかに蓬萊山の現わるるあり。
- 又進みて大なる平野に出る。大川三流あり。これより進みてようやく蓬萊山の麓に近くなる。
- 又進みて蓬萊山の中央に登り来ませば、ついに大原野に出る。大原野には水あり、火の燃える所あり、湯の湧く所あり。草木大いに繁茂してその実多し。ここを穴宮の大御宮という。常に蓬萊山を遥拝ましまして、その状貌、世に類少なく二つとなき山なるにより高砂の不二山（ふじやま）と名付け、その高い地に火の燃え、かつ日に向へるにより日向（ひむか）の高地火（たかちほ）の峰と名付け、麓の冬木多き所を青木ヶ原と名付け給う。穴宮所在の丘を阿田都山（あたつやま）と、その大原野を高天原と名付け、山の祖山なるにより一に阿祖谷（あそたに）または阿祖原とぞ称しぬ。
- また不二山西南の地は一帯海に面し、一望千里なるにより遠久見留州（とおくみるくに）と名付け、不二山西北すなわち記祖地・飛太野の北方一帯は遠く蓬萊山を探し、多くの山川を越えて来まししにより越地（えち）と名付け給う。

○全羅南道寶城郡の海岸（寶城湾）に上陸して、北へ向かい寶城市へ行き、そこから現在の国道2号線とほぼ同じ道を通り、東へ向かう。山あり、谷ありの道である。やがて海岸に出て、海で魚を釣っている。国道2号線も順天湾の海岸を通る。魚を釣ったという海岸は筏橋や、九龍や、水徳であろう。

そこからまた山野の道を通る。2号線に沿って晋州市まで来る。そこから南へ国道3号線と同じ道を通り「高天原（泗川）」へ來ているのであろう。

図16 高天原の位置

○「山を越え谷を渡り、原野に出る」と、そこは「一帯稲穂なりけり」とある。

- 「前200年」ころの朝鮮半島南部ではすでに本格的な「稲作」が始まっている。

その後「国常立尊」も「高天原」に来る。これが「高天原」の建国である。

□「高天原」の建国

- 「高天原」の建国は「前200年」ころである。
- 「高天原」は朝鮮半島南部の「泗川市」である。
- 「国狭槌尊」による建国である。
- 「国常立尊」は父母が死去した後に高天原にやって来る。
- 「国常立尊」は「高天原の西方と北方」を、「国狭槌尊」は「高天原の南方と東方」を治める。（『宮下文書』）
- 「高天原」の建国は「逃亡」である。「秦」や「漢」の圧力によるものである。

3 高天原の時代

(1) 高天原の系図

図17 高天原の系図

[注記]「天照大神」は朝鮮半島南部に居たのであり、日本列島には来たこともない。
しかし『宮下文書』は「豊阿始原世」の初代と記すので「神道」が祖先神とするのは間違いではないと言えるであろう。

(2) 「天照大神」の即位

『宮下文書』は「天照大神」の即位を次のように記す。

天照大御神は諱を初め大市毘女尊といひ、後大日留女尊という。伊弉諾・伊弉冉二柱の尊の皇女にまします。二柱より、天つ日嗣の大御位を受けさせ給ひ、四方の惣大御洲を知食しめし給ふ。（中略）是に至りて、（中略）国を豊阿始原瑞穂国と名づけ給ひき。
『宮下文書』

□「豊阿始原瑞穂国」の始まりである。

(3) 第二 天の忍穂耳尊

二代目を「天の忍穂耳尊」とする。

天之忍穂耳尊は幼名を日吉毘古命といひ、諱を豊武毘古尊といふ。国常立尊の皇子豊斟淳尊の嫡孫にましまして、真心武命諱阿和武男命の御子にまします。阿和武男命、子なきを憂ひ高天原の神祖神宗に祈りて、一子を生みませるや、暴かに神避りましぬ。天照大御神取つて以て御子となし、阿和武男命の義妹青木比女命をして養育ましまさしめ、日吉毘古命と名づけ給ひき。（中略）立てて天つ日嗣となし、諱を豊武毘古命と改め賜ふ。是に至って阿祖山太神宮なる宮守の宮に於いて、三品の御宝を捧げて、大御位を受けましき。

『宮下文書』

○天之忍穗耳尊が生まれると父はすぐに死去する。

- 天照大神が引き取り養育する。(養子にする)
- 天照大神は日嗣を「天之忍穗耳尊」に譲る。
- 「天之忍穗耳尊」は「豊阿始原瑞穗国」の二代目になる。

(4) 『契丹古伝』と『宮下文書』

『宮下文書』は「天之忍穗耳尊」と記す。「天之」は「天（あめ）の」である。

『契丹古伝』は「安冕辰沔氏」と記す。「安冕」は「あめ」である。「安冕」＝「あめ」＝「天」である。「天之忍穗耳尊」は「安冕辰沔氏」であることが分かる。

高天原を建国した「国狭槌尊」「国常立尊」は「安冕辰沔氏」である。『契丹古伝』から『宮下文書』に歴史は続いていることが分かる。

□「倭人（天氏）」の歴史は『契丹古伝』から『宮下文書』に続いている。

- どちらも史実を記録しているから整合する。
- 『契丹古伝』『宮下文書』を見ない限り「倭人」の歴史は究明できない。

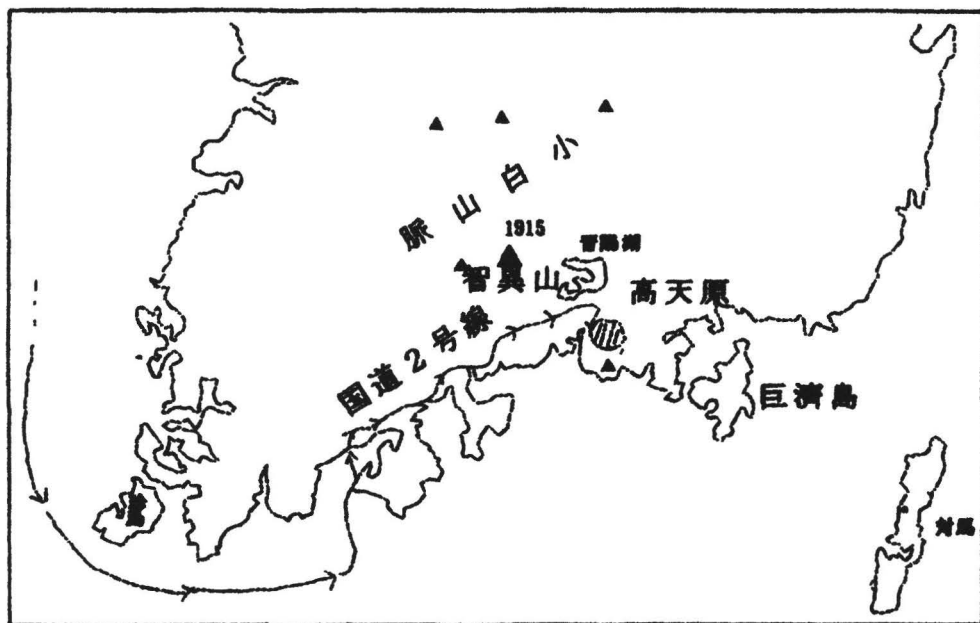


図16 高天原の位置

高天原の系図

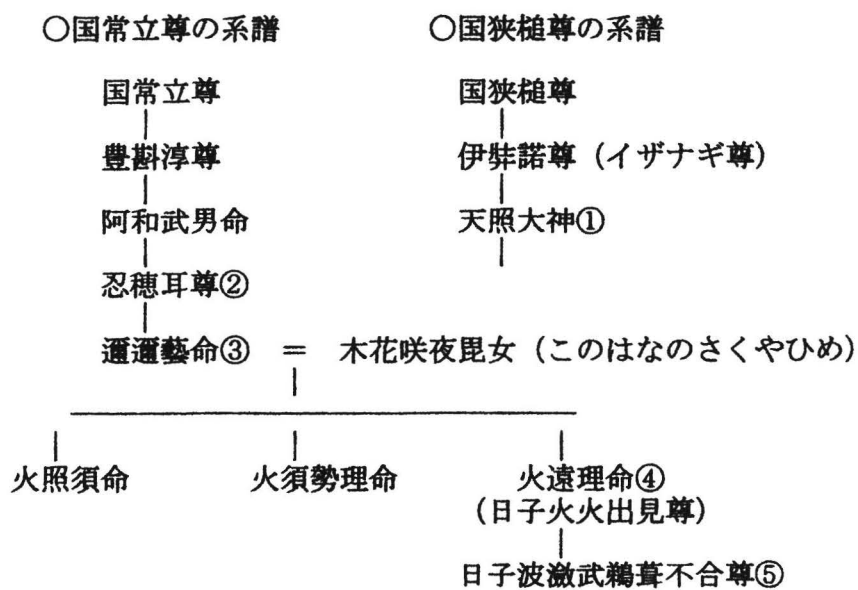


図17 高天原の系図

(注) 番号は「豊阿始原世五代」(『宮下文書』より)

第9章 『古事記』『日本書紀』の「天孫降臨」

1 『日本書紀』の「天孫降臨」

(1) 「瓊瓊杵尊（邇邇藝命）」の天孫降臨

『日本書紀』は「天孫降臨」を次のように記す。

天照大神の子正哉（まさか）吾勝（あかつ）勝速日（かちはやひ）天忍穗耳尊、高皇產靈尊（たかみむすひのみこと）の女を娶り、天津彦火瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）を生む。皇祖（みおや）高皇產靈尊は遂に「天津彦火瓊瓊杵尊」を立てて、葦原中国の主にせむと欲す。

然るに彼の地は多く螢火の光（かがや）く神、及び蠅声（さばえ）なす邪（あ）しき神有り。故、高皇產靈尊は八十（やそ）諸神（もろかみ）を召し集えて、問いて曰く、「吾、葦原中国の邪鬼を撥（はら）い平（む）けしめむと欲（おも）う。當（まさ）に誰を遣わさば宣（よ）けむ」という。『日本書紀』

- 最初に「天穗日命」を遣わすが、三年過ぎても報告がない。
- 次にその子の大背飯三熊之大人（武三熊之大人）を遣わすがやはり復奏が無い。
- 次に天稚彦を遣わすがやはり復命が無い。
- 遂に、高皇產靈尊は瓊瓊杵尊を降（あまくだ）りまさしむ。

(2) 「天八重雲を排分（おしわ）け」て降臨

「天孫降臨」と言われる記述。

皇孫、乃ち天磐座（いわくら）を離れ、且つ天八重雲（やえたなぐも）を排（おし）分けて、稜威（いつ）の道別（ちわき）に道別きて、日向の襲の高千穂峯に天降る。『日本書紀』

○「天孫降臨」の根拠

- 「皇孫」が天降る。……「天孫」＝神の子
- 「天八重雲（やえたなぐも）を排（おし）分けて」……天からの降臨
「日本は神の国」、「日本人は神の子」と言われるようになる（戦前、戦中）。

(3) 『日本書紀』の「天孫降臨」の地

『日本書紀』は「天孫降臨」の地を次のように記す。

『日本書紀』は「本文」と複数の別伝を「一書」として記録している。

- 日向の襲の高千穂峯に天降りましぬ。本文

- 筑紫の日向の高千穂の穂觸（くしふる）の峯に到る。 一書第一
- 日向の穂日（くしひ）の高千穂の峯に降り到る。 一書第二
- 日向の襲の高千穂の穂日の二上峯の天の浮橋に到る。 一書第四
- 降り到る処を日向の襲の高千穂の添山（そほりやま）の峯という。

一書第六

『日本書紀』

『日本書紀』は「天孫降臨の地」を「日向のXXXの高千穂峯」と記す。これらの記述から「日向＝宮崎県」としている。

ところが「一書第一」には「筑紫の日向の高千穂」とある。「日向」は「筑紫」にあるという。

しかし従来は「筑紫の日向」を無視している。

『日本書紀』の「日向のXXXの高千穂峯」では具体的な場所は不明である。

2 『古事記』の「天孫降臨」

(1) 天照大神と「天孫降臨」

「天孫降臨」する土地（水穂国）には荒ぶる神が居るという。

天照大神の命を以て、「豊葦原之千秋長五百穂（ながいほ）の秋之水穂国は、我が御子、正勝（まさかつ）吾勝（あかつ）勝速日（かちはやひ）天の忍穂耳尊の知らず国ぞ」と言因（よ）さし賜ひて、天降（くだ）したまひき。是に天の忍穂耳尊、天の浮橋にたたして、詔りたまひしく、「豊葦原之千秋長五百秋之水穂国は、いたくさやぎて有りなり。」と告（の）りたまひて、更に還り上りて、天照大神に請（もう）したまひき。

爾（ここ）に高御産巢日（たかみむすひ）神、天照大御神の命以ちて、天の安の河原に、八百萬（やほよろづ）の神を神集へに集へて、思金（おもひかね）の神に思わしめて詔りたまひしく、「此の葦原の中国は、我が御子の知らず国と言依（よ）さし賜へりし国なり。故、此の国に道速（ちはや）振る荒ぶる国つ神等の多（さわ）に在りと以為（おも）ほす。是れ何（いづ）れの神を使わしてか言趣（ことむ）けむ。」とのりたまひき。 『古事記』

○最初に「天の菩比（ほひ）命」を遣わすが、三年経っても復奏なし。

■次に「天の若日子命」を遣わすが、八年経っても復奏が無い。

■次に「建（たけ）御雷（みかづち）之神」を出雲に遣わし、平定する。

「邇邇藝命」が「天孫降臨」する。

爾に天照大御神、高木神の命以ちて、太子正勝吾勝勝速日天の忍穂耳命に詔りたまひしく、「今、葦原中国を平（ことむ）け訖（お）へぬと白（もう）

せり。故、言依（よ）さし賜ひし随（まま）に、下り坐（ま）して知らしめせ。」とのりたまひき。爾に其の太子正勝吾勝勝速日天の忍穗耳命、答へ白（もう）したまひき、「僕（あ）は降らむ装束すつる間に、子生れ出でつ。名は天の邇岐志国邇岐志天津日高（ひこ）日子番（ほ）の邇邇藝命ぞ。此の子を降ろすべし」という。『古事記』

爾に日子番の邇邇藝命、天降りまさむとする時に、天の八衢（やちまた）に居て、上は高天原を光（てら）し、下は葦原中国を光（てら）す神、是に有り。（中略）故、問ひ賜ふ時に、答へ白（もう）ししく、「僕（あ）は国つ神、名は猿田毘古神ぞ。出で居る所以（ゆえ）は、天つ神の御子天降り坐（ま）すと聞きつる故に、御前に仕へ奉らむとして、参向（まいむか）へ侍（さもら）ふぞ。」ともうしき。（中略）

是に其の遠岐志（おきし）八尺（やさか）の勾瓊、鏡、及び草那藝劍、（中略）を副え賜ひて、詔りたまひしく、「此の鏡は、専ら我が御魂として、吾が前に拝すが如くいつき奉（たてまつ）れ。（中略）」という。『古事記』

(2) 「天孫降臨」

邇邇藝命の「天孫降臨」。

故爾に天津日子番の邇邇藝命に詔りたまひて、天の石位（いわくら）を離れ、天の八重多那雲を押し分けて、いつのちわきちわきて、天の浮橋にうきじまり、そりたたして竺紫の日向の高千穂の久士布流多氣（くしふるたけ）に天降（あも）りましき。『古事記』

(3) 「天孫降臨」の地

『古事記』は「天孫降臨」の地を明確に記す。

此の地は韓国に向かい、笠沙の御前（みさき）に真来（まき）通り、朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり。故、此の地は甚だ吉（よき）地。『古事記』

「筑紫の日向」に「天孫降臨」したとある。『日本書紀』と同じである。ところが『古事記』には「天孫降臨」した地についての説明がある。

- a. 韓国に向かい
- b. 笠沙の御前に真来通り
- c. 朝日の直刺す国
- d. 夕日の日照る国

(a) は「韓国に向かい」とある。韓国に向かって開いている土地は筑紫である。宮

崎県は韓国に「背を向けて」いる。

次に(c)には「朝日の直刺す国」とある。朝日が出ると直ちに射すという意味であろう。東側には朝日をさえぎる高い山がなく、平地が広がる土地をいうのであろう。しかも久士布流多気(くしふる岳)とか、高千穂峯に天降るとあるから、近くに山がある。

筑紫の中で(a、c)の条件を満たすところは福岡平野ぐらいしかない。地図を見ると福岡市西区に室見川が流れており、その支流に「日向川」がある。飯盛山の麓を流れる川である。さらに、そこから糸島市へ向かうところに峠があり「日向峠」という。

福岡平野の西側には今もこのように「日向」という地名がある。ここが「筑紫の日向」であろう。「筑紫の日向」の推定地は福岡市西区の飯盛山付近である。

□「天孫降臨」の地は「福岡市西区の飯盛山付近」であろう。

■「日向」の地名が現在もある。「筑紫の日向」であろう。

■「飯盛山」は「久士布流多気(くしふる岳)」、あるいは「高千穂峯」と云われていたのであろう。

3 『古事記』『日本書紀』の「天孫降臨」の問題点

(1) 『古事記』の「天孫降臨」の問題

『古事記』『日本書紀』は共に「天孫降臨」したのは「瓊瓊杵尊(邇邇藝命)」としている。

『古事記』は「高御産巢日(たかみむすひ)神、天照大御神の命以ちて」と記す。「高御産巢日(たかみむすひ)神」は「天照大御神」の命令により、葦原の中国を平定する使者を派遣している。

しかし「高御産巢日(たかみむすひ)神」は『宮下文書』の「高皇産霊神」であろう。「国常立尊」「国狭槌尊」の父である(p43 図17)。「天照大御神」の曾祖父である。「天照大御神」の時代にはすでに死去している。「天照大御神」が曾祖父の「高皇産霊神」に命令するはずがない。

(2) 『日本書紀』の「天孫降臨」の問題

『日本書紀』も「皇祖(みおや)高皇産霊尊は遂に天津彦火瓊瓊杵尊を立てて、葦原中国の主(ぬし)にせむと欲す」と記す。

「高皇産霊尊(高皇産霊神)」が「瓊瓊杵尊」を「葦原中国の主(ぬし)にせむ」としている。「高皇産霊尊(高皇産霊神)」は「瓊瓊杵尊」の「五代前」の人物である。これもあり得ない記述である。

□『古事記』も『日本書紀』も、「五代前」の「高皇産霊尊(高皇産霊神)」が「邇邇藝命(瓊瓊杵尊)」の「天孫降臨」にかかわっていると記す。あり得ないことである。

■『古事記』『日本書紀』は共に登場人物の「系譜」や「時代」が曖昧である。

第10章 「倭人（天氏）」の移住（佃説）

1 高天原の危機

(1) 外寇（邇邇藝命の時代）

第三代「邇邇藝命」の時代に次のような事件が起きる。

○「西北大陸」からの侵攻

一日（ある日）、西国より豊玉武毘古命馳せ来たり奏すらく、西北の大陸より、大軍附地見島に攻め来れりと。乃ち尊は高天原の大御宮に神后初め諸々の天つ神国つ神、八百萬神を神集に集へて、言向けまさむことを議り給いき。

（中略）乃ち武知男命を惣軍司令頭長となし、経津主命・武甕槌尊・玉柱屋命・御名方命の四軍神を軍大將となす。而して尊は神霊の御玉を玉体に副え、室雲の実剣を奉持し、神后は内持所の御鏡を玉体に副え、軍勢一萬八千神を率いて、作田毘古命を御前に立たして、遂に天降り給ひき。日夜重ねること五十三日にして西国に着きましぬ。『宮下文書』

○敵と戦うが大敗する。

尊は、先ず事代主命の長子天之手長男命、婦神手長比女命をして、附島及び行島の両島を防ぎ守らしめ給ひき。外寇、日夜大挙して来たり攻む。命、防備を悉くして迎え戦う。されど衆寡敵せず。行島の石田の原に於いて、竟に二柱共に戦死ましましき。（中略）

事勇男命、阿加見田原南山に於いて竟に戦死ましましき。（中略）弟神事力男命は（中略）同所北大山に於いて亦戦死ましましき。（中略）而して行島の兄神事武男命はこれより又七十五日後れて伊岐原山に於いて戦死ましましき。（中略）附地見島にて、尾茂太留尊の五子武佐太毘古命は軍勢を率いて松浦の湊に於いて賊の大軍と戦う。八百萬の神々奮激先を争いて闘ひまします。されど衆寡敵せず。吾軍屡々（しばしば）利あらず。命、遂に戦死ましましき。『宮下文書』

(2) 敵を撃退

しかし遂に敵を撃退する。

是に於いて仁人木尊（邇邇藝命）は四方諸々の州国に詔して軍兵を催（うなが）さしめ給ひき。義に赴きませる神々亦多く、我軍大いに振う。

乃ち尊は、諸々大將に命じて部署を定め、先ず賊大挙して数万の軍船にて攻め来れる湊々に進軍せしむ。（中略）是に於いて積日の兵乱初めて言向け和平しにき。『宮下文書』

2 高天原からの移住の決意

(1) 再び外寇（日子火火出見尊の時代）

第四代「日子火火出見尊」の時代に再び外寇がある。

醜男命附地見島より、早馬にて来たり奏すらく、西大陸より大軍攻め来たれりと。則ち、諸々の天つ神・国つ神八百萬神を、高天原家基都の宮に集へて、之を議りましき。即ち附地見島は西大陸に近きに因り、屢々外寇を蒙れり。如かず神都を附地見島に遷して、内地を知食しめしつつ、外寇を防ぎまさむには、と議爰（ここ）に決しぬ。
『宮下文書』

「西大陸より、大軍攻め来れり」とある。前回の「邇邇藝命」の時は多くの戦死者を出している。

「日子火火出見尊」は「諸々の天つ神・国つ神八百萬神」を集めて議論する。その結果「神都を附地見島（筑紫）に遷す」ことを決める。

(2) 日子波瀲武鸕鷀不合尊に譲位

「神都」を「筑紫」に移すにあたり、「日子火火出見尊」は皇子「阿祖男命」に譲位する。

乃ち尊は宮守の宮の御神殿に於いて、大御位を皇子阿祖男命に禅り、諱を日子波瀲武鸕鷀不合尊と改め賜い、以て神都を附地見島（筑紫）に遷させ給ひき。
『宮下文書』

「日子火火出見尊」は高天原に留まる。

父大御神（日子火火出見尊）は旧都高天原小室の家基都の宮に止まりまし給ふ。（中略）

後に、高天原家基都の宮に於いて神避りましぬ。（中略）大室の神山の陵に葬る。時に、四海諸々の州国孰（いず）れも豊作なりしに由り、天つ日子穗々出見尊と諱し奉る。
『宮下文書』

3 筑紫へ移住（天孫降臨）

(1) 高天原から筑紫へ

「豊阿始原の世」の五代目「日子波瀲武鸕鷀不合尊」は「筑紫」へ征伐隊を派遣する。

今や、天つ神・国つ神・八百萬神の決議に基づき、将に神都を附地見島に遷さむとし給う。（中略）時に軍勢日に加わり、凡そ十萬餘神称す。
則ち、軍勢を二手に分ち、附地見島、東の水門より攻むる大將は、元帥火照

須命、副帥武甕槌命・稚武王命、軍勢五萬餘神とし、他の一軍は、附地見島、南の水門より攻むる大將は、元帥火須勢理命、副帥経津（ふつ）主命・建御名方命、軍勢五萬餘神とす。（中略）

乃ち南軍は南水門より上陸し、賊の大軍と戦い、奮撃轉鬪六百五十日にして、遂に賊軍を西北方面に撃壊しぬ。（中略）

是より旧都高天原を天都といい、新都を神都という。 『宮下文書』

(2) 「天孫降臨」は北部九州への侵略

「火照須命」と「火須勢理命」は各々「五萬餘の兵」を率いて「附地見島（筑紫）」を攻める。

○附地見島（筑紫）の征伐隊

■火照須命の東軍（五萬餘）……筑紫の東の水門＝「博多湾（筑前）」

■火須勢理命の南軍（五萬餘）……南の水門＝「有明海（肥前南部）」

□火照須命と火須勢理命の侵攻により、「筑前」～「肥前南部」を征伐する。

■これが「天孫降臨」である。

■「天孫降臨」は「高天原」から「北部九州」への「侵略」である。

(3) 「日子波瀲武鸕鷀草不合尊」の移住

「附地見島（筑前～肥前南部）」を征伐したので神皇「日子波瀲武鸕鷀草不合尊」が移住する。

乃ち神皇は、左右大神初め、天つ神・国つ神の諸役神を支り加えて、高天原より附地見島の新宮に天降りましまし給う。（中略）而して其の新に都を築きしに因り、附地見島を筑市（ちくし）島（後世、作筑紫）と改め給ひ、其御舟の初めて着きましし水門を津久始（つくし）初古崎（はこさき）とそ名つけける。 『宮下文書』

福岡市箱崎に上陸している。

（注）神皇「日子波瀲武鸕鷀草不合尊」は「火照須命」、「火須勢理命」の甥である（p43 図17）。

(4) 「移住」の時期

「移住」の時期について検討しよう。当時の平均寿命は「40才～45才」位であろう。平均在位は「15年～20年」位ではないだろうか。

○「天孫降臨」の年代

- 「前200年」に「高天原」を建国した「国常立尊・国狭槌尊」から「六世代目」が「天孫降臨」している。
- 「国常立尊・国狭槌尊」の父母はすでに年老いており、「高天原」の建国は壮年になっている息子達がしている。したがって「国常立尊・国狭槌尊」の在位は「5年」位と短いであろう。
- 伊弉諾尊と天照大神の在位は「15年～20年」位であろう。
- 忍穗耳尊は遅く生まれているので在位は「10年～15年」であろう。
- 邇邇藝命の在位は「15年～20年」位であろう。
- 邇邇藝命の息子「火照須命・火須勢理命」が「天孫降臨（北部九州の侵略）」をしている。「5年後」ころであろう。
- 「天孫降臨」する時期は「高天原」の建国から「 $5 + (15 \sim 20) + (15 \sim 20) + (10 \sim 15) + (15 \sim 20) + 5$ 」年後であろう。
- 「前200年」から「65年～85年後」頃である。
- 「天孫降臨」の時期は「前135年～前115年」頃になるであろう。

□「天孫降臨」の時期 … 前後に余裕をみて「前140年～前110年」頃であろう。